

## 目次

まえがき .....	iii
<b>序 章 主観性の言語学—文法構造・構文と主観性—</b> .....	<b>1</b>
1. はじめに .....	1
2. 認知文法における文法構造と構文構築 .....	4
2.1 動詞主導と認知主導の構文構築	4
2.2 動詞 <i>drive</i> の主語	8
2.3 結果構文の直接目的語	12
2.4 カテゴリーを超える拡張—所格交替から名詞転換動詞へ—	16
3. 認知文法と他の理論 .....	22
3.1 ラネカーとトロゴットの主観性・主体化 (subjectivity・subjectification)	22
3.2 認知文法とクロフトの構文根本主義 (Croft 2001) —品詞と構文—	28
3.3 認知文法と構文文法 (Construction Grammar)	32
4. インタラクションに関わる認知モードと構文 .....	36
4.1 2つの認知モード	36
4.2 2つの認知モードと構文の対応	45
5. 結び .....	55

## 第1部 認知と文法・構文

<b>第1章 構文の認知構造ネットワーク—全域的言語理論を求めて—</b> .....	<b>59</b>
1. はじめに .....	59

2. 事態の認知パターンと構文.....	62
2.1 基本認知パターンと基本構文	62
2.2 語彙上の理由による構文の拡張	65
3. 認知構造の拡張と《使役》をベースとする認知構造ネットワーク ....	69
3.1 《使役》構造とその拡張としての have a kick, kick at	69
3.2 結果構文の拡張	74
3.3 中間構文と make 使役	79
3.4 《使役》をベースとする認知構造ネットワーク	82
4. 結び.....	85
<b>第2章 認知構文論—語彙主導・構文主導・認知主導の構文構築—</b> .....	<b>87</b>
1. はじめに .....	87
2. 認知的際立ちと言語構造・構文 .....	88
3. SVO 構文の認知分析と構文ネットワークの全体像.....	90
4. 認知から構文, 構文から語彙へ (1) 一項の交替現象と際立ち— .....	96
5. 認知から構文, 構文から語彙へ (2) —結果構文の認知分析—.....	99
6. SVO 構文から結果構文への拡張.....	102
7. 結び—語彙と構文の連続性—.....	108
<b>第3章 認知文法から見た語彙と文法構文</b>	
<b>—自他交替現象と受身構文の文法化—</b> .....	<b>111</b>
1. はじめに .....	111
2. 意味の主體的側面 (認知主体の捉え方, 認知プロセス) の意義.....	113
2.1 動詞 <i>rise</i> の場合	114
2.2 <i>be surrounded</i> の場合	116
2.3 一般動詞 <i>have</i> から文法的要素 <i>have (-en)</i> へ	118
2.4 Langacker (1990b) と Langacker (1998) の主体化	

—文法化との関連で—	123
3. 語彙 vs. 文法構文における認知プロセス	126
3.1 自他交替と認知プロセス	127
3.1.1 語彙レベルの自他交替	127
3.1.2 構文レベルの自他交替	132
3.1.3 非能格自動詞の他動詞用法—行為動詞の自他交替—	138
3.1.4 使役構造を認知ベースとしない自他交替 —自他交替のスキーマ化—	140
3.2 受身文の文法化と認知プロセス	146
4. 結び	152

#### 第4章 二重目的語構文の認知構造

—構文内ネットワークと構文間ネットワークの症例—	155
1. はじめに	155
2. 語彙と構文の意味と意味表示	155
2.1 語彙と構文ネットワークの差異	156
2.2 構文文法と認知文法のアプローチの差異	159
2.3 意味表示のための複合マトリクス	161
3. 二重目的語構文の意味の抽象化	166
4. 構文間ネットワーク	178
4.1 使役移動構文・to 与格構文・二重目的語構文	178
4.2 二重目的語構文・for 与格構文・ <他動詞文+ for 前置詞句>構文	179
4.3 have 受益文から have 受益使役文へ	189
4.4 受益と被害の鏡像関係による構文ネットワーク	193
4.5 have 構文と参照点構造	198
5. 結び	201

<b>第5章 再帰中間構文の認知構造</b> .....	<b>203</b>
1. はじめに .....	203
2. 構文の用法拡張は放射状か，線状のか .....	204
2.1 再帰中間構文の線状的意味拡張	208
2.2 再帰構文から再帰中間構文の認知構造 I へ	210
2.3 再帰中間構文の認知構造 II から認知構造 V へ	211
2.4 Kemmer の分析の問題点と解法	213
3. ネットワークか，意味地図か .....	217
4. 構文の連続性の質—意味量か，認知プロセス自体の捉え直しか— ..	221
4.1 受身用法への拡張の度合	221
4.2 受身用法の拡張と意味増加	223
4.3 確立した受身用法の特性	225
4.4 受身化に関する他理論との比較	228
5. 意味地図と対応する表現形式 .....	230
6. 結び .....	235
<b>第6章 消えたエージェント</b> .....	<b>237</b>
1. はじめに .....	237
2. 自動詞文，受身文，再帰中間構文の認知構造 .....	238
2.1 自他交替の自動詞文の認知構造	238
2.2 受身文の認知構造	241
2.3 再帰中間構文の認知プロセス	242
2.4 三者の関係	246
3. 難易中間構文の認知構造 .....	250
4. 結び .....	256

## 第7章 構文のネットワーク表示と意味地図表示

—Evolutionary path の提案—	259
1. はじめに	259
2. 結果構文の捉え方と種類	261
3. 結果構文のネットワーク表示と意味地図表示	263
4. 結果構文の進化経路 (evolutionary path)	265
5. 結び	268

## 第2部 認知モードと言語類型・言語進化

### 第8章 言語における主観性・客観性の認知メカニズム

1. すべては主観	271
2. 主観・客観と2つの認知モード	272
3. ラネカーと茂木の認知モデル	274
4. 認知モードと言語の主観性・客観性	275
5. 結び—主観性から言語起源へ—	278

### 第9章 与格の意味地図—外置と主体化を座標軸として—

1. はじめに	281
2. 外置と2つの認知モード	282
3. 外置と与格の用法	285
4. 主体化と与格の用法, 与格の意味地図	295
5. 与格と題目と主語	299
6. 結び	301

<b>第10章 否定と（間）主観性—認知文法における否定—</b> .....	<b>303</b>
1. はじめに.....	303
2. 認知文法における否定.....	304
3. 認知的否定分析の展開—間主観性と連動する否定—.....	310
4. トートロジー構文の間主観性.....	318
5. 結び.....	321
<b>第11章 認知モードの射程</b> .....	<b>323</b>
1. はじめに.....	323
2. 視点構図と認知モード.....	324
2.1 視点構図	324
2.2 認知モード—IモードとDモード—	328
2.2.1 Iモード	328
2.2.2 Dモード	333
3. 視点と認知モード.....	336
4. 認知モードと日英語対照, および言語の客観性・主観性.....	342
4.1 Iモード型言語としての日本語・ Dモード型言語としての英語	342
4.2 言語の主観性・客観性	352
5. 文法化と言語の進化.....	353
5.1 文法化と認知モード	353
5.2 言語進化と認知モード	359
6. 結び.....	361

## 第3部 認知と語用論

<b>第12章 「勝ち勝ち」「負け負け」</b>	
トートロジーに潜む認知的否定一.....	367
1. はじめに.....	367
2. 勝ち負け三題.....	367
3. 連続的カテゴリー観と非連続的カテゴリー観.....	368
4. アリスとモモのトートロジー「私は私」.....	370
5. 認知的アプローチ vs. 語用論的・意味論的アプローチ.....	372
6. 結び.....	374
<b>第13章 メタ言語的if節—メタ認知・間主観性の語用論的表出—.....</b>	<b>375</b>
1. メタ言語的ということ.....	375
2. 論理的if節と日常言語(発話)のif節.....	376
3. メタ言語的if節.....	378
3.1 文レベル 379	
3.2 発話行為レベル 380	
3.3 会話レベル 382	
4. 論理的if節とメタ言語的if節のレトリック.....	387
4.1 論理的if節のレトリック 387	
4.2 メタ言語的if節のレトリック 389	
5. その他のメタ言語現象.....	396
6. 結び.....	398
<b>第14章 認知言語学と認知語用論.....</b>	<b>401</b>
1. はじめに.....	401
2. RTとCLの「認知」.....	401

3. RTの問題点とCLによる解法.....	405
3.1 LFと明意の問題点	
—「認知ベース上のプロファイル」による解法—	405
3.2 尺度含意 (scalar implicature) の扱いの問題点	
—例示 (instantiation) による解法—	410
3.3 暗意の推論メカニズムの問題点	
—認知ドメイン (スクリプト) による解法—	415
3.4 法助動詞分析の問題点—外置による解法—	418
4. 結び.....	422
初出一覧.....	424
参考文献.....	425
索引.....	448

## 序 章

# 主観性の言語学

## —文法構造・構文と主観性—

### 1. はじめに

認知言語学によってようやく、言語が深く主観に根ざす存在であることが共通理解となった、と言ってよい。例えばレイコフやジョンソンの経験主義的な認知意味論は、世界観やカテゴリー化が、私たちの身体性や私たちと環境との直接的なインタラクションに根ざしていることに注目する (Lakoff 1987, Johnson 1987)。またラネカーやディーンのリ知文法・認知統語論は、言語構造や文法構造が、私たちのもつ一般的な認知能力や認知プロセス、とりわけ際立ちや注目のあり方の反映であるとする (Langacker 1987, 1991, Deane 1992)。さらにトローゴットが意味変化や主体化における主観性に言及するとき、その主観性は、テキストに加える解釈が主観的ということであり、したがって解釈が定着していく際に見られる意味の展開も主観的ということになる (Traugott 1989, 1995)。

単純化して言えば、身体を有する「私」が対象と直接インタラクトしながら、「私」に備わっている認知能力によって、「私」なりの解釈や認知像を作り上げるということである。それが客観として映るのは、共同体を成す「私たち」が同じような姿形をし、同じような認知能力をもつために、基本的な解釈や認知像が共通することになり、それを客観と見なしているということである。

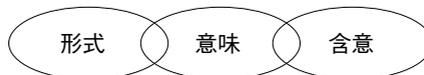
# 第1章

## 構文の認知構造ネットワーク

### —全域的言語理論を求めて—

#### 1. はじめに

言語を人間の認知機構の中に位置づけて捉えようとするとき、形式(音韻論・統語論)、意味(意味論)、含意(語用論)という3領域は、必ずしも独立して自律的なモジュールをなしているわけではない。それらは相互に関連して、連続体を成している。いま、その連続体の1つのイメージを下図のように表してみよう。そうすると、形式と意味、意味と含意が直接繋がって連続している。言語を相対的に捉え、全域的な言語理論を構築しようとする際には、このような連続する部分を十分精確に解明しておく必要がある。まず、意味と含意の連続性については、それぞれの周縁部が重なりあい、両者の性質を有する意味タイプがあるというところにその連続性を見ることができる。形式と意味の連続性については、両者の不可分の関係を、形式が意味に動機づけられているという認知文法や認知意味論の見解に見ることができる(意味と不可分の文法化はそのよい例である)。また、形式(統語論)と含意(語用論)の関係は一般に、いわば意味をインターフェイスとした関係であるということができる。



## 第2章

# 認知構文論

## —語彙主導・構文主導・認知主導の構文構築—

### 1. はじめに

言語を認知的に分析するとは、さまざまな文法現象、構文現象を何らかの認知的要因の反映として分析することに他ならない。何かを認識しあるいは理解する際、何らかの認知能力が働いており、さまざまな認知プロセスが存在する。認知的要因としての認知能力、認知プロセスについては種々指摘されているが(e.g. Fauconnier 1999<sup>1</sup>)、最も基本的な認知的要因に、「認知的

---

1 例えば Fauconnier (1999) は次の①から⑥のような認知能力・認知プロセスを挙げている。

① Figure-ground and view point organization pervades the sentence (Talmy 1978, Langacker 1987/1991), the Tense system (Cutrer 1994), Narrative structure (Sanders and Redeker 1996), in signed and spoken languages, and of course many aspects of non-linguistic cognition. ② Metaphor builds up meaning all the way from the most basic levels to the most sophisticated and creative ones (Lakoff and Turner 1989, Grady 1997). ③ And the same goes for metonymic pragmatic (or reference point) functions (Numberg 1987) and mental space connections (Sweetser and Fauconnier 1996, Van Hoek 1996, Liddell 1996), which are governed by the same general Access principle. ④ Frames, schemas and prototypes account for word level and sentence level syntactic/semantic properties in cognitive and construction grammar (Lakoff 1987, Fillmore 1985, Goldberg 1997, Langacker 1987/91), and of course they guide thought and action more generally (Bateson 1972, Goffman 1974). ⑤ Conceptual blending and analogy play a key role in syntax and morphology (Mandelbit 1997), in word and sentence level semantics (Sweetser 1999), and at higher levels of reasoning and rhetoric (Robert 1998, Coulson 1997, Turner 1996). ⑥ Similarly, we find force dynamics and fictive motion (Talmy 1985,

## 第3章

# 認知文法から見た語彙と文法構文

## —自他交替現象と受身構文の文法化—

### 1. はじめに

語彙と文法構文、あるいはより一般的に語彙と文法ということについて、記号的代案(symbolic alternative)をとる認知文法の枠組みでは、語彙と文法はいずれも記号構造として連続体を成している。そこで問題になるのが、語彙と文法が具体的にどのような連続しているのか、とりわけ語彙の意味と文法的要素の意味がどのような連続体を成しているのかということである。厳密に言うと実は、文法化・主体化の観点でLangacker (1990b) と Langacker (1998) とでは少なからず変化しており、そのため、語彙と文法の連続性に関しても、その具体的な中身が変化したということがある。

文法化と主体化が記号構造の意味に関わることは変わっていないが、Langacker (1990b) においては、語彙的要素が文法的要素へと拡張する文法化の過程とは、語彙の意味の客体的側面(概念内容)が徐々に主体的側面(認知主体の捉え方、認知プロセス)に転換し、ゆえに主体的側面が増加しつつには主体的側面のみを表すようになる過程であった。そうすると、語彙と文法的要素の連続性とは、(1a)のように、より右側のより文法的な要素になるにしたがい、意味の客体的側面(概念内容)が徐々に減少し、意味の主体的側面が増加していくような連続性だということになる。

## 第4章

# 二重目的語構文の認知構造

## —構文内ネットワークと構文間ネットワークの症例—

### 1. はじめに

言語知識を表示する上でネットワークによるものが最も本来の姿に近く有力な方法であるが、本章では、認知文法の枠組みから、英語の二重目的語構文の意味ネットワーク、それに、二重目的語構文と他の関連構文からなる構文間ネットワークの可能な姿を求めながら、構文のネットワーク一般について、その特性とそこから見えてくるものについて示してみたい。

構文の意味ネットワークと構文間の(意味)ネットワークのいずれを明らかにしようとする場合にも、すぐに問題になることが2点ある。1つは、語彙の意味と構文の意味との差異であり、もう1つは、語義ネットワークと構文の意味ネットワークの形態上の差異、つまり語義ネットワークと構文の意味ネットワークとが同種の形態で記述できるか、という点である。これらの点に関連する予備的な考察を第2節で行い、第3節では、二重目的語構文の意味の抽象化について議論する。第4節で構文間ネットワークについて考察する際には、通言語的な視点も導入し、ドイツ語の与格構文や日本語の「(て)やる」構文との対照も行う。

### 2. 語彙と構文の意味と意味表示

意味の違いや意味ネットワークの違いというとき、意味とは何かというこ

## 第5章

# 再帰中間構文の認知構造

### 1. はじめに

言語は、常に変化している。これは構文主義ではなくても、構文を言語の中心要素とする立場では、構文が常に変化しているということ、あるいは構文全体が常にいずれかの方向に動いているということに他ならない。言語知識の重要な部分を占める一連の構文が、何らかのネットワークを成して言語知識を構成していることは確かであるが、ネットワークではややもするとそのような変化の結果だけが強制的に表示され、言語や構文の動的側面の詳細が見落とされがちである。

本章では、意味地図に基づいて、とりわけ文レベルの構文間に見られる拡張の方向性と連続性の詳細について、いわゆる再帰中間構文の場合を証例として見てみたいと思う。その場合、次の3点が論点となる。つまり、①構文の用法が拡張するとき、それは放射状か線状のかということ。②構文の各用法や構文間の関係はネットワークを成すのか、それとも意味地図上の領域を占めるのかということ。最後は③構文の連続性が概念内容 (content) の量に関わるのか、認知プロセス (construal) に関わるのかということについてである。

再帰中間構文を *x verb REFL* (主語 + 他動詞 + 再帰形) という形式で一般化すると、REFL (再帰形・再帰代名詞) には、*oneself* (英語)、*sich* (ドイツ語)、

## 第6章

# 消えたエージェント

### 1. はじめに

本章では、以下のように動作主 (agent) を表現しない4種類の構文について、それぞれの構文の認知構造を提示し、動作主が表現されない認知メカニズムについて考察する。

(1) a. 自他交替の自動詞文

Kate sat on the chair and it broke.

(*Cambridge International Dictionary of English*)

b. 受身文

The block of stone...had to be broken in two before it could be moved. (*Longman Activator*)

c. 再帰中間構文

...the point (of the spear) passed the Egyptian's head and broke itself against stone wall. (Geniušienė 1987: 204)

d. 難易中間構文

He was no longer covered with a skin but with a crust...which broke easily. 'That's napalm,' said the doctor. (*OED*)

Glass breaks easily. (*Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 4th ed.)

## 第7章

# 構文のネットワーク表示と意味地図表示 —Evolutionary path の提案—

### 1. はじめに

構文を対象とするとき、ネットワークと意味地図でまず大きく異なるのは、構文の合成過程はネットワークで示せるが、意味地図では示せないということである。逆に、構文の各用法の全貌を一定の予測性をもって捉えることは意味地図にはできるが、ネットワークにはできない。構文がその構成要素に還元できないことを考慮すると、構文の合成過程がネットワークで示されるとしてもそこにはおのずと限界があり、意味地図をベースにした構文の進化経路 (evolutionary path) のような概念が有効かもしれない。

本章の議論に入る前に、言語知識としての構文の集合が、意味地図でわかりやすく表示できることを見ておこう。よく構文は、語彙から談話レベルの構文までさまざまなサイズの構文と、個々の具体的な構文から抽象的な構文スキーマまでさまざまな抽象度の構文とから成る、と言われるが、このような言語知識は、次の図のように、schematicity と complexity を座標軸とする一種の意味地図によって捉えられる (cf. Langacker 2005)。

## 第8章

# 言語における主観性・客観性の 認知メカニズム

### 1. すべては主観

「凡そ文学的内容の形式は(F + f)なることを要す」とは、漱石の『文学論』(1907)冒頭の一文である。直後にF = 知的要素, f = 情的要素とあるが、その後の記述では、Fとfはそれぞれ「客観的」に記述される部分と書き手の思いや感情の発露としての「主観的」側面にあたる。また時枝誠記の『国語学言論』(1941)では、江戸期の国文学者鈴木胤の直観を受けて、「詞」と「辞」の考察が深められるが、詞と辞はそれぞれ表現の客観的、主観的側面に対応する。

このように、以前より言語表現には主観的成分が不可欠なことは十分意識され、主張もされていたが、研究の主流は、表現の客観的成分の分析に向かったようである。命題と呼ばれる客観的意味内容が、機械的にどのような言語形式と対応しているか、ということが研究の中心となったわけである。話し手の発話時の「判断」や「思惑」や「感情」がどのように絡み、どう言語形式に反映するのかということあまり重視されなかった。欧米の研究でも事情は同じかそれ以下であったが、ここ数年の間に、このような主観的側面が言語構造のあり方と成り立ちに深く関与していることが十分認識され、この方面の研究が増加している。Scheibman(2002)などはその代表的な研究である。

## 第 9 章

# 与格の意味地図

### —外置と主体化を座標軸として—

#### 1. はじめに

与格の意味用法ネットワーク分析における問題の1つは、根本的に異質の3種類の意味用法を原理的に関連づける方策を欠いている点にある。つまり、きわめて主観的な「心的与格」の用法と、事態内の参与体を表す客観的な「受け手用法」との間に広がる多様な用法群をどう原理的にまとめるか、またこれら2つの用法と「題目」に近い談話的機能の与格用法とをいかに関連づけるか、という問題が残されている。

与格の用法をほぼ網羅しているポーランド語与格の3つの分析 (Wierzbicka 1988, Rudzka-Ostyn 1996, Dąbrowska 1997) も基本的に、スキーマ用法とそれを具現する用法群 (instances) の列挙あるいはネットワーク表示であり、上の問題は残されたままである。本章は、ヴェジビツカの明示する与格の31の意味用法 (Wierzbicka 1988: ch. 7) を「意味地図」上に整合的に位置づける試みである。

座標軸をもつ意味地図によって、各用法の位置づけが明確になり、より正確な言語間の対照も可能となるが、本章は、「外置」と「主体化」をいわば縦と横の座標軸とすることにより、縦軸の「外置」の度合が増す順に、ヴェジビツカの23種の用法が「心的与格」「利害の与格」「受け手与格」を焦点用法として連続的に位置づけられ、また横軸の「主体化」の度合が増す順

## 第10章

# 否定と（間）主観性

## —認知文法における否定—

### 1. はじめに

心理学者のテラスによると、ヒトの乳児（9ヶ月から12ヶ月）にのみ、情報共有を志向する行動が見られると言う（Terrace 2005）。乳児はある物を見止めると、その物と親など身近な者との間で視線を往復させ、その物に気づかせようとする。相手が気づくまでその行動を続けるということは、相手がその情報を有しないという状態（否定的状態）が解消されるまで（相手との情報共有が確認できるまで）この行為を続けるということである。このような心の理論の初期段階（共感志向性）にヒトのコミュニケーションの起源を求めようとする研究に、否定を絡めると、否定は、単純に肯定命題と否定命題の関係のようなものではなく、他者の有する情報と自己の有する情報との間の相互作用（interaction）の問題として位置づけられることになる。

本章では、Langacker (1991) の認知文法における否定の観点と、Verhagen (2005, 2007) による間主観性に基づく否定の分析を紹介する。Verhagen の枠組みでは、文否定が何をどのようなメカニズムで否定するのか、新たな知見が得られるはずである。最後に「勝ちは勝ち」「負けは負け」のようなきわめて間主観性の高いトートロジー構文について若干の考察を行う。

## 第 11 章

# 認知モードの射程

### 1. はじめに

視点というとき「内」か「外」かが問題になるが、本章では、対象や状況との身体的インタラクションがあるかないか、という観点を中心において言語現象の説明力を見ていくことにしたい。例えば、日本語の「\*太郎は寒い」が通常ダメで、英語の *Taro is cold.* がいいということについても、「寒い」が状況の寒さを直接経験している人(身体的にインタラクトしている人)の感覚しか表さないのに対して、英語の *cold* あるいは構文がインタラクション抜き視点のみの移入を許すからだというような説明になる。

言語の主観性・客観性についても、主語や目的語を用いて表現すれば、トラジェクターやランドマークのような認知的要因によって主語や目的語が決まるのだから、どのような表現も主観的だということから免れない。ただ「雨が降った」に対して「雨に降られた」がより主観的だと思われるのは、こちらの表現が、雨とのインタラクションによって受ける迷惑感を表しているためであり、言語の主観性・客観性の問題も身体的インタラクションのあるなしを導入することによって、より明確に捉えられる。

そもそも私たちの認識は、対象との身体的インタラクション抜きには成立しない。このことは現象学や今日の身体論が明らかにし、とりわけ自然科学としての量子力学が明確にしたことである。例えば外界は、何らかの環境・

## 第 12 章

# 「勝ち勝ち」「負け負け」

## —トートロジーに潜む認知的否定—

### 1. はじめに

トートロジー(同語反復)が意味をもつ仕組みについては語用論を中心にさまざまな説明がなされてきたが、いまだ決定的な解明には至っていないと言える。認知言語学の観点から、<連続的カテゴリー観の否定>という解を提示する。

### 2. 勝ち負け三題

標題のトートロジー表現についてはいくつか忘れられない勝負の場面がある。1つは二子山部屋の親方貴乃花(2018年退職)がまだ貴花田だったころ。若く、伸び盛りの貴花田が、上位力士との対戦で最後に惜しい逆転負けを喫することがあった。群がる記者たちが「惜しかったですね」「あと一押しでしたね」などと慰めのことばを投げかけると、貴花田は無然とした表情で、ただ一言「負けは負け」と言ってさっさと引き上げた。負けを勝ちに近づけ、あわよくば負けを勝ちにすり替えてしまいそうな報道陣の慰めを一蹴する「負けは負け」であった。「勝ちに等しかった」という慰めや言い訳から生じる気の緩みを警戒するようでもあった。貴花田にはこのような場面が何度かあった。

同じような場面は、女子マラソンの松野明美(現熊本県議会議員)にもあっ

# 第 13 章

## メタ言語的 if 節

### —メタ認知・間主観性の語用論的表出—

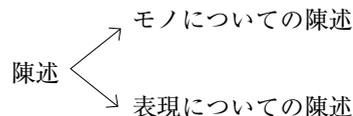
#### 1. メタ言語的ということ

次の発話は、多少マジックじみた言い方になるが、2つの読みをもつ。

(1) My mother tongue is English.

2つの読みのうち、あまり意識されないほうの読みは、「my mother tongue という表現は英語である」というものである。これではいかにもカンニングの印象を与える。しかし、一般的な読み(「私の母語は英語だ」)のほうが意味内容に関するものであるのに対し、この読みが表現そのものに関するものであるということは強調されてよい。

この読みをもう少し分析してみよう。(1)の発話は、指示(主語)と陳述(述語)から成る。指示機能には、モノを指示する場合と言語表現を指示する場合(この例では自己指示)がある。陳述のほうも、モノについて陳述する場合と言語表現について陳述する場合がある。



## 第14章

# 認知言語学と認知語用論

### 1. はじめに

本章では第1節で、関連性理論が認知語用論 (Cognitive Pragmatics) と呼ばれるときの「認知」と、認知言語学 (Cognitive Linguistics, CL) の「認知」との差異を明確にし、第2節で、関連性理論 (Relevance Theory, RT) の概念や分析法の問題点を4点指摘する。問題点を指摘すると同時に、認知言語学からの解法や解法の方向性を示す。問題点は、論理形式 (logical form, LF) と明意、尺度含意 (scalar implicature)、暗意の推論、法助動詞の分析、に関するものである。

### 2. RTとCLの「認知」

RTを認知語用論 (cognitive pragmatics) と呼ぶときの認知 (cognitive) とはなにか。まず、Marmaridou (2000: 1-2) では、(1)にあるように、Austin, Searle, Griceに始まる哲学的語用論から、4タイプの語用論が展開したとしており、その1つとして② cognitive pragmaticsが位置づけられている。(その後の語彙語用論 (Horn 2002)、歴史語用論 (Jucker 1995) の展開もある。)

- (1) philosophical pragmatics (see Austin 1962, Searle 1969, Grice 1975)  
→① radical and neo-Gricean pragmatics (see Cole 1981, Horn